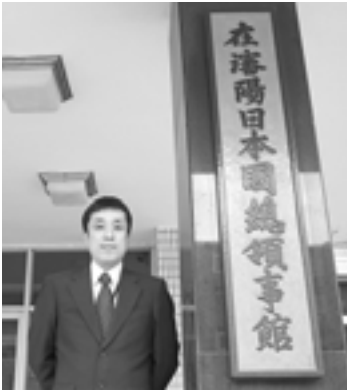


一衣帯水の隣国、 中華人民共和国



大谷 英樹 (おおたに ひでき)

前・在瀋陽日本国総領事館領事

1968年北海道釧路市生まれ。90年北見工業大学工学部土木工学科卒、同年北海道開発局入局、主に河川事業に従事。2010年4月外務省出向、在瀋陽日本国総領事館領事。13年4月から国土交通省北海道開発局札幌開発建設部河川計画課流域計画官(岩見沢河川事務所計画課併任)。

中華人民共和国と日本の時差はわずか1時間、私が赴任した中国東北地方の瀋陽^{しんやう}へも成田空港から3時間半のフライトで行くことができます。こうした地理的要因や歴史的背景から東北地方は日本とのつながりが大変深く、在日中国人の4割弱がこの地方の出身者という統計もあります。日本と中国の交流は、「魏志倭人伝」などの記録に残るものだけをひも解いても二千年の歴史を有します。しかし、社会体制の違いや過去の歴史をめぐる軋轢^{あつれき}など様々な要因で、中国は日本人にとって“わかりづらくて遠い国”という印象が強いのではないのでしょうか。私が3年間過ごした中国東北地方を紹介しながら、“今思う中国”について記してみます。

東北三省と北海道

中国東北地方は、その名のとおり中国の北東端に位置し、真夏の最高気温は30℃を超え、冬季の降雪は少ないものの、厳寒期には最低気温が-30℃を下回る日も少なくない、北海道と同様の寒冷地で、四季の変化も比較的似ています。その東北地方の中でも、私が勤務した在瀋陽日本国総領事館が管轄する遼寧省・吉林省・黒龍江省の3省は「東北三省」と呼ばれ、日本の約2倍の面積に日本の人口よりやや少ない約1.1億人が住んでいます。豊富な天然資源に恵まれているほか、農畜産業が盛んで、中国における食料基地の側面も持ち合わせている点も、日本における北海道の立ち位置と似ています。日中それぞれの最北端にあたる北海道



図1 中国東北地方の位置

と黒龍江省、地域の中心都市である札幌市と遼寧省瀋陽市など、北海道と東北三省との間には、現在6つの姉妹都市があり交流しています。また、東北三省に限らず、中国における北海道の知名度は、東京や京都などと並び抜群です。2008年に中国で大ヒットした「非誠勿擾」(邦題「狙った恋の落とし方」)という映画の影響が大きいようで、ロケ地となった阿寒湖や知床など道東の美しい風景が大きな反響を呼んだそうです。

東北三省の政治・経済・文化の中心地は人口約700万人を擁する遼寧省の省都・瀋陽で、総領事館所在地でもあります。瀋陽を知っている日本人は残念ながら少数派のようです。しかし、映画「ラストエンペラー」や小説「坂の上の雲」などでも描かれている、清朝末期から第二次世界大戦終結にかけてのこの街の歴史は、日本抜きでは語れないものです。当時「奉天」と呼ばれていた瀋陽で起きた柳条湖事件(満洲事変)を発端とした日本による満洲占領、そして日中戦争へと続く歴史が現在の日中関係に大きく影を落としているからです。他方、この時代に日本が投資したインフラは、戦後の中国経済を大きく支え、今日の発展につながる礎となりました。今も現役で使われている旧奉天駅(現瀋陽駅)、旧奉天郵便局(現瀋陽市和平区郵便局)、旧奉天ヤマトホテル(現遼寧賓館)などの多

くの建造物からは、日本が残した足跡を垣間見ることができます。なお、中国政府は公式見解において、独立国としての「満洲国」を一切認めておらず、「偽満洲国」と呼称しています。

一衣帯水

中国南北朝時代の歴史書『南史』の故事に由来する“一衣帯水”という言葉があります。辞書には、極めて近接しているたとえ。海や川によって隔てられているが近いこと(大辞林)。ひとすじの帯のような幅の狭い川や海。また、それを隔てて隣り合っていること(大辞泉)。などと解説されています。あまり耳慣れないこの言葉は、今から41年前の1972年9月29日、田中角栄総理大臣と周恩来総理が日中国交正常化を実現した際の歴史的な共同声明の一節に次のように登場します。「日中両国は、一衣帯水の間にある隣国であり、長い伝統的友好の歴史を有する。両国国民は、両国間にこれまで存在していた不正常な状態に終止符を打つことを切望している」この共同声明は今日の日中関係の原点です。

私の中国滞在中の3年間、両国の国民感情は大きく揺れ動きました。2010年に尖閣諸島(中国名:釣魚島)沖の漁船衝突事件により悪化した国民感情は、翌年3.11の東日本大震災を契機に改善へと向かいます。日本人が自らの足元を見直す契機ともなった未曾有の大災害は、隣国の中国国民に大きな衝撃を与えたと同時に中国人の心にも変化を与えました。国家元首の胡錦濤主席が、地震発生からわずか7日目に、日本国民へのお見舞いと犠牲者へ哀悼の意を表すため自ら日本大使館を訪問したことは、極めて異例のこととされています。このような日中両国に友好や支援の機運が高

北海道と東北三省との姉妹都市

1980年	札幌市-遼寧省瀋陽市
82年	夕張市-遼寧省撫順市
86年	北海道-黒龍江省
95年	旭川市-黒龍江省ハルビン市
2000年	帯広市-遼寧省朝陽市
04年	千歳市-吉林省長春市



瀋陽駅(旧奉天駅)



日本語看板が見える「奉天」時代の瀋陽駅前



当時の建物が残る現在の瀋陽駅前

まるときに必ず登場する言葉が“一衣帯水”です。胡主席はこのとき日中両国を“一衣帯水の友好隣国”と述べています。他の近隣諸国との間ではあまり使われず、専ら日中関係の強い絆を表すときだけに用いられるこの言葉は、長い交流の歴史を共有する両国が過去の困難を克服し、複雑な感情を抱きつつも互いを尊重しながら関係をつないできたことを表すバロメーターのように思えます。

しかし、先人の知恵と努力により実現した日中国交正常化から40年の不惑の年を迎えた昨年、日本政府の尖閣諸島国有化を端緒に中国各地で抗議活動や反日デモが頻発、産学官民あらゆる分野の交流イベントがほぼ全て中止に追い込まれました。悪化した両国の国民感情は未だ改善されず、“一衣帯水”の言葉を耳にする機会もありません。さらにはこの言葉を意味深長に解釈し警戒する向きも一部に見られるほどです。このような憂うべき事態が打開され、この言葉が本来の意味で使われる日々が戻ることを願います。

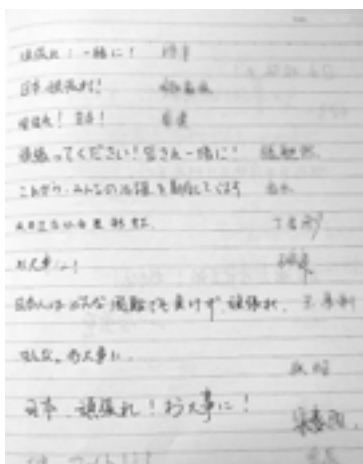
中国人は本当に日本が嫌いなのか？

“偽満洲国”建国のきっかけとなった柳条湖事件発生日「9月18日」は、「勿忘国恥(国辱を忘れるなかれ)」のスローガンのもと、毎年、中国で反日機運が盛り上がる特別な日です。瀋陽市内の「九・一八歴史博物館」はその名が示すとおり、日本の“侵略”とそれに対する“抗日戦争”の歴史を中国人民に宣伝しています。その直前の9月11日に発表された今回の尖閣諸島国有化が反日ムードを助長しただろうことは想像に難くあ

りません。中国メディアは、こぞって日本による島の国有化を連日繰り返し報道しました。一方で、一部暴徒の反社会的な行動は極めて限定的にしか報道しなかったため、デモ隊による総領事館への投石被害も一般にはほとんど知られていません。

このような状況におかれている“普通の中国人”はどのように感じていたのでしょうか。ここでいう“普通の中国人”とは、私と家族が日常生活で接していた人たち、例えば、よく行く八百屋や果物屋、妻のママ友など、私の肩書きを知らない市井の人たちです。9月18日を境に起きた様々なことに関して私が彼らから感じとったことは、日中関係の良し悪しは彼らの関心事項ではないということです。正確には、日中関係は彼らが自らの行動を決定する際の唯一無二の判断基準では決してないということです。そのおかげで私たち家族は、いつもと変わらず八百屋で野菜を買えまし、子どもも友達と遊ぶことができました。彼らも複雑な感情を持っているのだらうと思いますが、日本人である私たちに対して態度を変えることなく、いつもどおり接してくれたことは、とてもありがたいことでしたし、感謝しなければなりません。日本人が在日中国人に対してどのように接するかを想像するとふに落ちるのですが、日本人も中国人も人情は共通なのだらうと思います。

今や世界第二位の経済大国となった中国政府の要人や報道官、共産党の宣伝媒体である国営メディアからは“大国”として威信をかけた発言や宣伝が繰り返されます。加えて中国に対するネガティブ報道が日本国内でセンセーショナルに伝えられると、日本人の多くは漠然とした不安や心配、憤りなどに駆られ、それが



震災直後に、日本語を学ぶ中国人大学生から届いた日本を激励する寄せ書き



九・一八歴史博物館 (旧館)



「日本は釣魚島から出ていけ」と反日メッセージを掲げつつ日本車を愛用

時として不信感を抱くまでになると、なかなか良い方向に事は進みません。しかし、“普通の中国人”とは違う立場から発信される“見かけの出来事”をうのみにすると見誤ります。

今の中国は、経済発展の不均衡や格差の是正、一人っ子政策の反動による急速な高齢化への対応、人口を支えるための資源・食料の確保、環境問題の克服、持続可能な社会・経済構造への転換など、喫緊の難題を同時に抱えるという過去にどの国も経験していない局面を迎えようとしています。しかも、国の大きさゆえに深刻であり、今こそ日本を含む国際社会との協調が必要不可欠なはずなのです。

私が懸念するのは、そうした現実を目を向けず、想像（妄想とも言うべきか）やインターネットなどの情報をあたかも全てであるかのような曲解し、批判・中傷することです。例えば、一部で耳にする“反日教育の影響で、中国の若い世代は日本に対して過激になっている”という論調も、インターネット世代の彼らほど日本のことをよく知っていて、アニメなど日本のポップカルチャーが人気を博していることを考えると、おいそれと肯定することはできません。また、圧倒的大多数の“普通の中国人”に今の日本の姿を正しく知ってもらうことが必要不可欠なのは言うまでもありません。もつれた糸を解きほぐすことは、一朝一夕にはいかなない地道な作業ですが、ひとりひとりが相手に対して関心を持つこと、知ろうという姿勢を持つこと、そして巷にあふれている目先の情報に惑わされずに様々な角度から物事を見る意識を持ち判断すること、その

先にしか本当の意味での“一衣帯水の友好隣国”への糸口は見えてこないのではないかと、今はっきりと思います。

余談

中国東北地方でお酒といえば、何と云っても「白酒」です。白酒は無色透明な蒸留酒の一種で、アルコール度数が40～50度、キツイものでは70度近いもので、地域によって沢山の銘柄があります。特筆すべきは、「干杯」という一気飲みの習慣で、こうして飲み交わすことで「老朋友」と認めてもらえます。老朋友とは「古くからの友人」という意味で、相手へ深い親愛の情を示す言い方です。こうなると仕事も人間関係もとても円滑に進みます。東北地方に根強く残るこの習慣ですが、一方で危険な飲み方なので、社会の成熟にともない徐々に薄れつつあるようです。なお、私の失敗談の紹介はここでは差し控えますので悪しからず。

子どもに優しいことも印象的です。満4カ月で連れていった息子は、当然の如く、ところ構わず泣く、寝る、騒ぐのですが、中国人はとても寛容で、全く気にしないばかりか、積極的に世話を焼こうとします。特に飛行機の中など逃げ場のないような場所で子どもがぐずり出したときなどは、日本では周囲からの冷たい視線に冷や汗をかくことが少なくありません。しかし、中国人はおおらかなもので、一緒にあやしてくれたり、喜んで遊んでくれます。小さな子どもを持つ親としてとても助けられた中国人の一面でした。日本ももっと子どもに優しい社会になってほしいと切に望みます。



馴染みの市場で野菜を買う妻（右）。市場の人たちは、私たちが日本人だと知っている



東北といえば白酒。瀋陽の地酒“老龍口（ラオロンコウ）”



仕事そっちのけで子ども（愚息）の世話を焼くウェイトレスたち